

## 特集用・宮崎汎会員の随想「忘れ得ぬ労使の人々」第22話

「社会人の原点それは挨拶です」 足立正 日本商工会議所会頭 日本生産性本部会長

今日から社会人として一人で生きていかねばならないと自らの巣立ちをはっきり意識したのは、財団法人日本生産性本部主催の新入社員総合講習会の場であった。今から半世紀余も

前の遠い昔の話である。

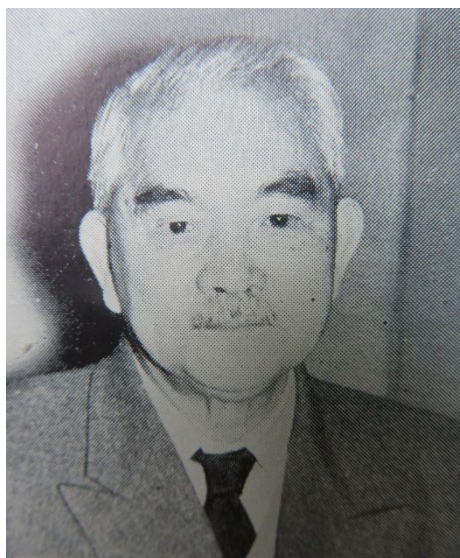
壇上に上がる講師は我が国の経済界、学界、マスコミ界のオピニオンリーダーと目されている著名な方々である。

日本一の規模を誇る新入社員研修は、都内の厚生年金会館、日比谷公会堂、共立講堂等、当時の大ホールを持つ会場を貸し切り、大企業から派遣された数千人に及ぶ新社会人となった若人が参加する大がかりなものであった。

参加者はいずれも緊張しながら人生の大先達の話にのめり込むようにして聞き入っていたものである。

私は身震いするほどの緊張感とやっと社会人として一人前になれたという気持ちの高ぶりで、腹の底から高揚感がふつふつと湧きあがってきたことを今でもはっきり思い浮かべることができる。登壇した講師の話の内容は無論のこと、その時の声や表情まで長年月を経た今でも記憶の底にある。

とりわけ講師の一人であった日本を代表する財界の大立者足立正氏の話には生涯忘れることが出来ない強い感銘を受けた。



足立正氏

氏は王子製紙社長や東京放送（現TBS）社長、日本商工会議所会頭、日本生産性本部会長など数えきれないほど多くの肩書を持つ財界の重鎮で、白髪、容姿端麗でまことに品格ある立派な方であった。

「社会人の最も基本は挨拶である。私は黙って頭を下げる人には目礼を返し、元気よくおはようございますという人には、私もおはようと言葉を返す。人と人との関係はまずここから始まるのです。挨拶のできない者は社会人として失格である」と柔らかな物言いをしながら壇上から語りかけるがごとく学校を卒業し社会人になりたての新入社員一同に諭されたのである。

大物財界人として知られている足立正氏の40分の講演が終わると万雷の拍手が湧き起こった。私も手が痛くなるほど拍手した。

今から思うと挨拶？そんなことは至極当たり前ではないかと思うが、わが国を代表する雲の上のエライ人の口から聞くとそれは処世の勘所のように感じ、人と人が交わる原点が挨拶にあると聞いて、何やら人的交流の「秘訣」を学び取ったかのような心地がしたものである。

振り返ると「そうか挨拶のできないものは一人前の社会人ではないのだ」とその言葉をしっかり胸にしまい込み今日まで実践しながら長い人生を過ごしてきたのである。

足立正氏の講演を聞いてから二年ほど経って、上司から重要書類なので足立会長に直接手渡すよう申し付かり日本商工会議所におられる氏の元に出かけた。

緊張しながら雲の上の人に書類を手渡し、深々と頭を下げると「ご苦労さんありがとう」と私をまっすぐ見て、普段見せない笑顔でいたわりの声をかけてくれた。

この時私は千載一遇のまたとないチャンスとばかりに勇を鼓して会長に向かって、新入社員総合講習会の時の心ときめいた感想を述べたのである。

足立会長は大きな机に座ったままでじっと私の顔を見上げて「よろしい。これから長い人生だ。しっかり勉強して頑張りなさい」と励ましてくれた。その声は今も耳朶にのこる。

帰途は緊張も解け心躍る思いで上司に報告を済ませた。上司はニコニコしながら「それは良かった。今の気持ちを忘れないように」とねぎらいの言葉をかけてくれた。

私の社会人として、組織の一員としての原点は純粹に何事も学ぼうとしたこの時代に培われたものであろうか。

企業の新入社員教育は現在も行われているが、当時と比べると最近では世知辛い世相を反映してかマンネ



国民運動として生産性運動が始まった頃の熱気

リ化し、社員教育を所管する人事部門は、費用の関係もあり大方の企業は社内で済ませている。内容もルーチン化し毎年決まりきった内容に終始している。これでは新入社員が感動を得るはずがないように感じられるのだが。

教育を受ける側に立つと、私の実体験では半世紀を経てなお講師の表情まで記憶に残るのである。社会人として人生の第一歩を踏み出す不安な気持ちを抱えている参加

者の身にたちかえて、もう少し慮らねばならないのではと感じ、派遣する側も派遣される側も義務感

や機械的な繰り返しであってはないのではないかと感じているのである。さて、日本に初めて設置された国際機関は「アジア生産性機構＝A P O」である。A P Oの設立準備にあたった日本生産性本部はアジア諸国へAPO への参加を呼び掛けた。

当時社会人第一歩を踏み出した私は郵便係を命じられた。

総務課長に呼ばれ「この手紙は足立会長のサイン入りでインドのネール首相に宛てた大事な手紙だ。発送を頼むよ」と言われ手渡された。

私にとっては、あの方からの手紙と聞いて、一通の封書を押し頂き緊張しながら京橋郵便局へ大事に持って行ったことを懐かしく思い出す。

1955年3月1日は、閣議決定により我が国に財団法人日本生産性本部が設立された年である。設立からよちよち歩きを経て3年目を迎えた。

当時の経営の最重要課題は、頻発する労働争議など労使関係の改善であり、また欧米の優れた経営管理手法の導入により、前近代的な企業体質の改善改革を目指す、さらに未成熟の中小企業の経営近代化等、我が国が直面している多岐にわたる企業経営の諸課題を矢継ぎ早に取り上げ、生産性本部は経済界を対象とする諸活動を精力的に展開した。

結果生産性運動に対する関心の高まりは企業のみならず一般社会にも広く及んだ。

生産性本部は設立3年を記念して、運動の軌跡を小冊子「生産性向上運動3年の歩み」にまとめ出版した。



日本生産性本部理事会 左から3人目は足立正会長

当時足立正氏が生産性本部会長であり、設立間もない日本の生産性運動を牽引した。日本は未だ経済的には貧しい国であったが、生活水準の向上、豊かさへの強い欲求が国中に満ち溢れ、企業の大小を問わず国から学ぶことに謙虚で熱心であった。当然生産性本部の催す様々な事業は常に聴衆で溢れかえっていた。

日本生産性本部の理事会は今振り返ると壮観だった。日本の各界を代表する著名人たちが真剣に迫力あ



る議論をするのである。時には声を荒げ喧嘩かと思えるような議論もあった。

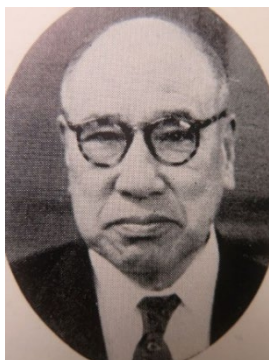
白熱した議論を収めるのは足立会長であった。

議論をしている双方を立て、共に納得するような落としどころで丸く収めるのである。

足立会長がやんわりした口を開くと、議論は収まり会場の雰囲気是和やかになるのである。

激しいやり取りを聞きながらどうなるのかと、かたずをのんで見守る一同にとっても、ほっとする一瞬である。

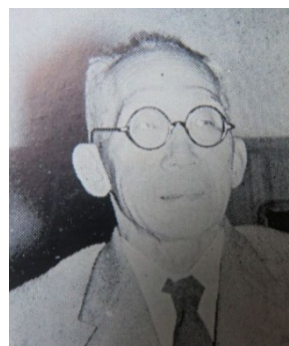
そして激することなく、そうそうたる人たちを従わせてしまう財界大物と言われる足立正という人に私は凄みを感じたのである。



石坂泰三氏



永野重雄氏



金正米吉氏



中山伊知郎氏

余談ながら日本生産性本部の初代会長は財界総理と異名をとった第2代経団連会長の石坂泰三氏であり、足立正氏は生産性本部の第2代会長である。

副会長は労使並びに学識経験者の3者で構成され、各界を代表する3名である。三者構成は生産性運動を推進するための特色ある組織形態である。

経営側は富士製鉄（後の新日鉄）の社長を務めた永野重雄氏、労働側は総同盟会長の金正米吉氏、学識者は当時陰悪であった労使関係の名調停役である中山伊知郎一橋大教授で中央労働委員会（＝中労委）会長であった。

このほど（2025年）我が国の生産性向上運動は創立70年周年を迎えた。長い足跡の数々を思い起こしながら感無量の心地である。

注）本稿の写真は「生産性向上運動3年の歩み」よりコピーしたものである